

江戸時代から昭和時代へと続く農業の変革—市内に残る民具—

旧石器・縄文時代から生活の痕跡を残した蓮田の地形は、洪積台地と沖積低地により成っています。生活を営むためには住み易く、農業が盛んになった時代には米作に適した沖積低地を有し、流通も元荒川や綾瀬川、見沼代用水の舟運、そして鉄道による運搬へと時代が変化しても、先人たちの功績により常に安定した経済規範が形成されていたようです。

このような時代の移り変わりの中でも、人々は米作りと季節に即した農間余業や祭り行事を集落(村)単位や家単位で行いながら1年の生活を送っていたことでしょう。人々の生活単位としては新年に始まりますが、実際には米作りが生活の始まりであり、その収穫と共に主な行事は終了し、**農間余業や祭り行事もこの合間に行われていたこと**でしょう。

春は現在では入学式のシーズンですが、昔の暦でいえば農作業の中でも最も重要な**稲作を始めるための準備**をする頃といえるでしょう。『榛名講(はるなこう:群馬県榛名神社)』は雹(ひょう)・嵐(あらし)除け、虫除け、『雷電講(らいでんこう:同県板倉雷電神社)』は雷(かみなり)除けだけでなく、雹嵐除けや豊作祈願、厄除け、『秋葉講(あきばこう:大宮秋葉神社)』は火防(ひぶせ)の神、『大山講(おおやまこう:神奈川県大山阿夫利神社)』は五穀豊穡、雨乞いの神、『大杉講(おおすぎこう:茨城県大杉神社)』は五穀豊穡と健康(疱瘡など疫病から村人を守る神)の神として信仰を集め、講中で「くじ引き」で選ばれた代表2~3名がお札を貰いに行くもの(代参:だいさん)です。市内のほとんどの地区で行われていた行事ですが、現在では少なくなっています。代参は作業が忙しくなる以前のこの時期に行われていました。この他にも民俗行事として閏戸や南新宿より北部で行われている『お獅子様(おししさま)』や伊豆島で行われている市指定文化財『伊豆島の大蛇(いずしまのだいじゃ)』でも疫病を防ぐと共に豊作が祈願されているようです。

稲作は、①『種もみの準備』から始まります。種もみを塩水に浸けることにより、中身のしっかりと詰まった良い種もみが沈み、選ぶことができます。選んだ種もみは病気にかからないように消毒し、芽がやすいように水に浸します。種もみを25日くらい冷水に浸けた後、苗代に蒔く1日前に30℃のお風呂に一晚浸けて芽だしをします。種もみに白い芽が0.5mmくらい出た後、予(あらかじ)め作っておいた苗床に蒔いて、約1ヶ月後の田植えまで、毎日の世話が続きます。

田んぼ作りの始まりは『田起こし』です。田の土を砕いて緑肥などを鋤き込みます。②『代掻き(しろかき)』は、田植えの前に水田に水を入れて土塊(つちのかたまり)を砕く作業です。水田の漏水を防止し、田植えを容易にすると共に、肥料と土をよく混合し、田面を平らにし雑草、害虫等の除去を助けるように整えます。③『田植え』は、田植え綱や田植え

定規を使いながら一定間隔に苗を数本(3~5本)ずつ植える作業です。現在でも機械で植えられなかった所は人の手で植えます。また、田植えの後の天気が良いと苗の根付きも早くなります。

5・6月の主な仕事は、④『草取り・草刈り』です。稲が良く育つように様々な道具で稲と稲の間をころがしながら田んぼの雑草をとりましたが、現在では除草剤という薬剤を使うので、人の手で草取りをすることも少なくなりました。また、畦(あぜ)の草は害虫のすみかになるので、こまめに草を刈って害虫の発生を予防します。

夏以降には稲も安定してきますが、草刈りなどの他にも、稲も病気にかかるため、⑤『防除』作業があります。最も恐ろしいのは「いもち病」という病気です。また、ウンカやカメムシなどの害虫も稲をねらっています。これらの病気にかからないように注意を払う必要があります。現在は薬剤を散布してこれらを防除します。⑥『中干し』とは、茎の増える時期が終わると田んぼの水をぬいて土をかわかすことです。中干しは、空気中の酸素を土の中に取り入れ、根をしっかりと張らせるために行います。これにより稲穂が実る時期の台風による倒伏(とうふく)を防ぐ効果もあります。また、稲の生育を調整したり、田んぼの土をかたくして秋の稲刈り作業をしやすくする効果もあります。茎の中から穂が出る「出穂(しゅっすい)」の時期には、この前後の気象条件の良否が収穫量に大きく影響します。⑦『稲刈り・脱穀』いよいよ稲刈りです。最近ではコンバインを使い、同時に脱穀までしてくれます。このため作業はずいぶん楽になりました。昔は、稲架(いなかけ)(馳(はぜ))を使用したハセ掛け、棒杭を使用したホニオ掛けなどにより、稲刈り後に稲を天日干しにし乾燥させていました。⑧『乾燥・もみすり』は、稲刈りの後もみを乾燥させ、もみがらをとり玄米にします。最近では、コントリーエレベーターという施設に乾燥から出荷までをまかせる農家も増えています。

蓮田では、稲の栽培には水田や畑が利用され、それぞれの環境や需要にあった稲品種が用いられます。水田では水稻(すいとん)、畑地では陸稲(りくとう、おかぼ)と呼ばれる稲が使用されますが、生物学的な区別は特にありません。

また、この他にも畑では様々な季節の野菜も作られ、江戸時代から戦後すぐの時期までは、ほぼ自給自足経済が営まれていたのでしょうか。現在では少なくなっているようですが、裏作として麦が作られていました。一時期は、甘藷と共に出荷されるほどの生産高をほこっていました。



田植え定規
田の中で回転させながら植える位置を決めるもの



田植え



出穂(しゅっすい)

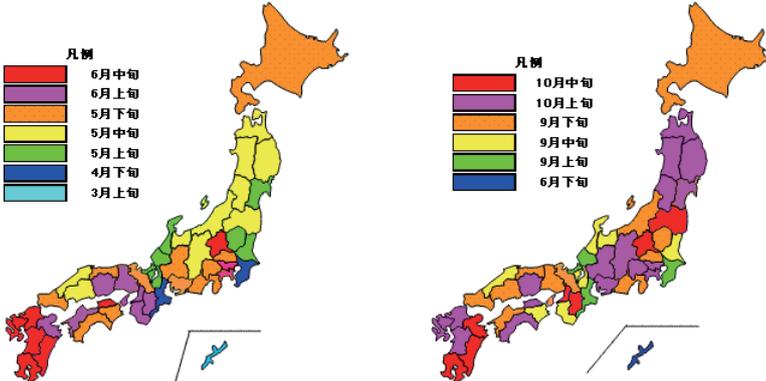


『ウィキペディア(Wikipedia)』稲作より

馳掛け(はぜかけ)



千歯扱き
乾燥の終わった稲穂を一定量束ね、千歯扱きを通して籾(もみ)を落とすものです。



全国の田植え(左)と稲刈り(右)の時期

「農林水産省統計部資料」より

全国で田植えの最盛期が最も早いのは沖縄県で3月5日頃、最も遅いのは佐賀県の6月20日頃です。全国的にみると、北が早く南が遅くなっています。これは稲の品種による違い(寒地には早生種が多く、暖地に晩生種が多い)や、南では麦の刈取り後に田植えを行う二毛作が多いことなどの理由によります。

【 循環型先進都市江戸と蓮田の関係 】

江戸時代の稲作技術発達で忘れてはならないのが、肥料としての人の糞尿の利用があります。下肥(しもごえ:つまり人間の排泄物)を肥料にして田畑に返す、という循環システムが既に定着していました。有機肥料であり、糞などと混ぜて発酵させて土造りをするので、長年使いつづけても土壌への悪影響が無かったようです。下肥は慢性的に不足がちで、しばしば大根などと現物交換して集められるほどに貴重な商品でした。蓮田にとって利便性が高かった点としては、江戸に様々な食料を運んだ帰りに下肥を積んで帰ることで無駄を省いたことでしょう。ちなみに当時、江戸と並ぶ大都市であったパリやロンドンでは排泄物の処理が大変な問題で、川などに直接流すという方法もとられていたようであり、江戸は循環型農業を実現していた先進都市だったといえます。

暮らしの営みの中で行われていた様々な年中行事

春の稲作前は、村の厄除け行事などと共に様々な代参講が行われ、五穀豊穡や様々な災害に対する祈願がなされました。『樺名講(はるなこう・群馬県榎名神社)』は雷(ひょう)・嵐(あらし)除け、『雷電講(らいでんこう・群馬県板倉電神社)』は雷除け、水風除けや豊作祈願厄除け、『秋葉講(あきはこう:大宮秋葉神社)』は火防(ひぶせ)の神、『大山講(おおやまこう・神奈川県大山阿夫利神社)』は五穀豊穡、雨乞いの神、『大杉講(おおすぎこう:茨城県大杉神社)』は五穀豊穡、雨乞いの神、『大杉講(おおすぎこう)として信仰を集め、講中で「くじ引き」で選ばれた代表2~3名がお札を貰いに代表して(代参)行くものです。市内のほとんどの地区で行われていた行事ですが、現在では少なくなっています。代参は作業が忙しくなる前のこの時期に行われていました。この他にも民俗行事としての市指定文化新宿より北部で行われていた「お稲子様(おしさま)」や伊豆島で行われている「市指定文化財『伊豆島の大蛇(いずしまのだいじや)』」もこれにあたり、村の四隅(東西南北)伊豆島では西側が川のため3方向)にお札や大蛇を立て、疫病を防ぐと共に豊作を祈願していたようです。また、4月8日には各村のお寺でオシャカサマ(花祭り)が行われ、お釈迦様を安置した

夏には稲も安定し一時の余暇を与えてくれたようです。7月1日には「初山(はつやま)」と呼ばれる子供の成長を祈る行事、「七夕(たなばた)」や「富士講(嶽名講)」、「愛宕講」の他、前述講行事や村単位でもお獅子様や14日の天王様が黒浜地区や蓮田地区で行われていました。他にも端午・菖蒲の節句等の各家で行われる行事や秋を前にした盆行事で先祖の供養を行っています。また、「お盆」は旧暦の7月15日を中心に行われる先祖供養の儀式で、仰と仏教が結びついてきた行事です。多くの地方で8月13日の「迎え盆」から16日の「送り盆」までの4日間をお盆とし、13日の「迎え盆(お盆の入り)」には、夕方に仏壇や精霊棚(しよりよりだんなの前)に灯りを灯した盆提灯(ぼんちようちん)を置き、庭先や門口に皮をはぎ取った麻の茎(麻幹:おがら)を焚きます。この灯りと炎を「迎え火」と言い、精霊に盆を家の場所を伝えます。また、先祖の墓(おがら)の近くにある場合に盆の前で盆提灯や盆提灯籠を灯し、お墓から家まで精霊を案内します。このように、お盆は精霊を家に迎え入れ

秋には「十五夜」が各家で行われ、旧暦の8月15日(新暦10月初旬)と9月13日(新暦10月末)に月を鑑賞することで、前者の夜を「十五夜(じゅうごや)」、後者の夜を「十三夜(じゅうさんや)」と呼びます。十五夜の月は、サトイモなどを供えることが多いため「芋名月(いもめいげつ)」とも呼ばれます。一方、十三夜の月は、栗や豆を供えることが多いため「栗名月(くりめいげつ)」又は「豆名月(まめめいげつ)」とも呼ばれます。どちらから一方の月見台を作することは、「片見月」として嫌われました。十五夜の月を鑑賞する習慣は中国から伝わったものであるのに対し、十三夜の月見は日本独特の風習であり、平安時代には貴族たちが集まった月を月見詩歌を詠んだのが始まりといわれます。また、十五夜の月は「中秋の名月(ちゅうしゅうのめいげつ)」とも呼ばれています。十日夜(とうかんや)とおかんや)は、旧暦10月10日(現在の11月10日)に行われる行事で「刈上げ(稲刈り)」が終わった後、家々や村単位での祝いの行事で、長野・山梨・埼玉県及び栃木・新潟の一部で行われていました。蓮田の地でも各村で行われて、おはぎなどを作り秋の実りをお祝いし、子供たちは芋がらを中に入れて菓(芋がら鉄砲・菓鉄砲)で地面を叩きながら

2月初午の日には、初午(稲荷講)が行われ、スミツカリ(大豆をつぶしたもの)と大根おろしを混ぜて煮たもの・赤飯などを作り、豆腐・油揚げなどを買って神(棚)に供え甘酒をあげようです。また、子供のみに稲荷社に籠る地区や稲荷講として籠る地区もあつたようです。この他にも継市(ひないち)や馬寄せなどのお祭り行事も行われている地域もあります。

お堂の屋根に粘土を被せて、摘んできた花を粘土に刺して飾ったようです。甘茶をお釈迦様にかけ、拝礼する地域もありました。田植えが終わると「サナブリ」が行われます。サナブリとは田の神が天にお帰りになることを言い、「田植えじまい(5月じまい)」としてボタモチをつくって神棚に供え、近所に配ることもあつたようです。田植えが無事に終了したことを感謝し、田の神を送る、田植えじまいの稲作儀礼といえるでしょう。また、「雨降り正月(あめふりしり)の日を「雨降り正月」と呼ばれるものもあり、昔の農村では雨降りを喜んでいわれています。

る事から始まります。なお、精霊棚とは、精霊を迎えるために、お盆の間だけ臨時に設ける祭棚のことです。14、15日は精霊が家に留まっている期間であり、仏壇にお供え物をし迎えて迎え入れられた精霊の供養をします。16日は「送り盆(お盆の明け)」で16日の夜に、精霊は再びあつた世へ帰っていきまふ。この時、迎え火と同じ位置に今度は「送り火」を焚き、再び帰りの道に照らして霊を送り出します。また、この時期に「施餓鬼(せがき)」も行われ、彼岸(ひがし)と「彼岸(しがらみ)」に対して、向う側の岸「彼岸」という意味です。「彼岸会(ひがしえ)」は雑節の一つで、春分・秋分を中日として前後各3日を合わせた7日間行われ、暦の上では最初の日を「彼岸の入り」、最後の日を「彼岸明け」といいます。俗に、中日に先祖に感謝し、残る6日は悟りの境地に達するのに必要な6つの徳目、六波羅蜜を1日に1つずつ修めるとされています。

「十日夜の菓鉄砲、大根は揚げ出せ、モグラは引ひ込め」などと呼ばながら「もぐら追い」を行い、カエル供養(妻時きの時、鎌・鋤を地面に入れカエルを殺してしまふ)が多かつたための供養をいたしたようです。また、荒神様(ボタモチ)を供えるところもあつた。参加した子供たちには各家庭でお菓子などをあげました。「大師講(だいしこう、でいしこう)」は11月23日夕方から24日にかけて行われていたもので、家々で小豆がゆ・団子などを食します。地域によっては智者大師・弘法大師・元三(がんさん)大師などを祭る地方もあつた。荒神様(こうじんさま)は我々(が)に一番身近な神様です。屋敷内では仏・神(かまどの神様)、屋外では土地の神(屋敷の守護神)として祀られています。仏教では仏・法・僧を守る神様を三寶(さんぼう)と呼び、荒神信仰はこの両者が一緒になって民間信仰となつたようです。また、年末から年始にかけては現在でも繰りかえられている新年を迎えるための様々な行事が各家庭・各村で行われていたことと思ふ。この他にも酒造りもこの時期に行われていたこととす。

馬寄(うまよ)せは牛馬に鈴などの飾り付けをしお参りに行くだけでなく、草競馬も行なわれたいようです。また、嫁いで1年目の嫁も盛装してお参りに行かれたようです。これ以外にも百万遍(ひやくまんべん)や大般若(だいはん)などの行事が行われていました。

【注意】下表の赤字はなくなりつつある行事、黄色字は赤字は少なくなつた行事を表示しています。

秋・冬の行事		夏の行事		春の行事		正月行事(冬の行事)	
大師粥	ダイシカク	八朔の節句	大山講	灌仏会	オシヤカサマ	恵比寿講	初詣
閏戸の式	三番	お獅子様	富士講	お獅子様	オシヤカサマ	御比	初湯
恵比寿講	庚申講	石尊灯籠立て	富土講	百万遍	オイバナ	お供え崩し	七草粥
十日夜	トオカイヤ	お盆	天王様	オイバナ	モメンボウサマ	マユタマ団子	お供え崩し
七五三	オトキ	施餓鬼	お獅子様	モメンボウサマ	モメンボウサマ	小豆粥	マユタマ団子
		雨乞い	虫送り	お寅講	お寅講	恵比寿講	初詣
		早魃時	初山	伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
			天王様	端午の節句	端午の節句	御比	七草粥
			お獅子様	サナブリ	サナブリ	御比	お供え崩し
			雨降り正月	雨降り正月	雨降り正月	御比	マユタマ団子
			虫送り	伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
			富士講	伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初湯
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	七草粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	お供え崩し
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	マユタマ団子
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	小豆粥
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	恵比寿講
				伊豆島の大蛇	伊豆島の大蛇	御比	初詣
				伊豆島の大蛇			